



Title	『金閣寺』の英語翻訳における金閣寺の擬人化に関する考察：10章を中心として
Author(s)	寺浦, 麻由
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 51-59
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/72812">https://doi.org/10.18910/72812</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 『金閣寺』の英語翻訳における金閣寺の擬人化に関する考察 -10章を中心として-

寺浦麻由

## 1. <sup>1</sup>本研究について

本研究は、三島由紀夫(1925-1970)の『金閣寺』(1956)における金閣寺の擬人化が英語翻訳アイヴゲン・モリスによる英語翻訳 *The Temple of the Golden Pavilion* (1959)でどう翻訳されたのか考察する。一人称独白体の本作品では、金閣寺について病的な執着心を持って語られている。本稿では特に10章においてその金閣寺の擬人化の削除について論じる。さらに、擬人化の削除とともに強まった主人公、溝口の主体性<sup>2</sup>について考察する。

平子(1999)は「日英翻訳は、『事態叙述文と命題文のやりとり』である。」(99)と述べた。その言葉通り、本作品でも日英表現の差異により金閣寺の風景を描写する事態叙述文<sup>3</sup>や金閣の擬人化が、溝口を主体とする命題文<sup>4</sup>に変化した。最終的には、溝口の主体性の強調された命題文を含む翻訳文が偶然にも、「見る」行為が強調された10章において巧みに融合し一貫性のあるテキストとなった可能性がある<sup>5</sup>と論じたい。

### 1.1 先行研究と英語翻訳の評価

先行研究に誤訳を調べ上げ、三島にその是非を確認した河合(1967)の論考がある。Hasegawa(2012)は、“Morris’s translation verges on the florid, although not excessively, as he dexterously conveys Mishima’s exuberant style.” (21) と三島の華美な文体の巧みな訳出を評価した。贅辞の多いモリス訳だが、実際にレトリックを分析した研究は不足している。

### 1.2 本研究の方法

原文である起点テキスト (source text : ST) と翻訳文である目標テキスト (target text : TT) を比較シフトを探る。<sup>5</sup>

## 2. 擬人化の英語翻訳について

観察したり理解したりする対象に、人間の感情や仕草の様々な側面を投入し、その観察の対象を生き生きとした形で理解する為に比喻を使うことがある。池上(2006)は擬人化について〈虚のイメージ〉が〈実のイメージ〉に被せられることによって後者が隠されてしまったりあるいは前者に近づける形で修正されたりすると表現した。『金閣寺』においては〈動的な金閣寺〉という虚のイメージと〈不動の金閣寺〉という実のイメージの競争が認められる。特に放火直前の10章には金閣の擬人化表現が多出する。また、それが10章にSTとTTの間に特に差異が認められた部分である為、本稿での考察の対象としたい。牧野(2018)は、「英語人は日本語人のように、人間以外の植物を含む生き物の擬人化の傾向を嫌う傾向が強い」(61)とし、それが主人公の心理過程を反映した表現でも、「滑らかな」翻訳文のため擬人化の削除が起こると述べた。『金閣寺』の英語翻訳においても擬人化の削除は認められる。

<sup>1</sup> 本項は言語文化レトリック研究会「翻訳と文学作品の解釈(2018年10月4日開催、於大阪大学言語文化研究科における発表)における発表に基づくものである。発表の機会を与えてくださった渡辺秀樹教授、いつもアドバイスをくださる大森文子教授に感謝申し上げます。また、出席者の方々の貴重なコメントにも感謝申し上げます。

<sup>2</sup> 主体的であること。認知言語学の主体については取り扱わない。

<sup>3</sup> 情報の既知、未知を軸にして事態を述べたり確認したりするもの。日本語文に多い。平子(1999)

<sup>4</sup> 対象世界を時称的、人称的にそれぞれ三区区分し、全てをそのどれかに分類する文。英語で好まれる。平子(1999)

<sup>5</sup> 三島由紀夫(1996)『金閣寺』新潮社、新潮文庫 Mishima, Yukio. (1984) *The Temple of the Golden Pavilion*. Rutland, Vermont, Tokyo, Japan. Charles E. Tuttle Company. First Vintage International Edition. October, 1994  
本文中の括弧内の数字はすべてこれらの版に拠る。

## 2.1 擬人化が英語翻訳されているテキストについて

本稿では特に10章の擬人化の削除について焦点を当てるが、モリス訳において擬人化が全て削除されているわけではなく、擬人化を残した忠実訳がむしろ散見される事を断っておきたい。そこで、まず擬人化が維持されたテキストに絞って、STとTTを比較する。

### (1) 美術書の知識から紡ぎ出した金閣

ST (1a)	TT (1b)
<p>[1]<sup>6</sup>夜空の月のように、金閣は暗黒時代の象徴として作られたのだった。[2]そこでわたしの夢の金閣は、その周囲に押しよせている闇の背景を必要とした。 [3]闇のなかに、美しい細身の柱の構造が、内から微光を放って、じっと物静かに坐っていた。<sup>(1)</sup>[4]人がこの建築にどんな言葉で語りかけても、美しい金閣<sup>(2)</sup>は、無言で、繊細な構造をあらわにして、<sup>(3)</sup>周囲の闇に耐えていかなければならぬ。<sup>(27)</sup></p>	<p>[1] Like a moon that hangs in the night sky, the Golden Temple had been built as a symbol of the dark ages. [2] Therefore it was necessary for the Golden Temple of my dreams to have darkness bearing down on it from all sides. [3] <u>In this darkness, the beautiful, slender pillars of the building rested quietly and steadily, emitting a faint light from inside.</u> <sup>(1)</sup>[4] Whatever words people might speak to <u>the Golden Temple</u>, <sup>(2)</sup> it must continue to stand there silently, <u>displaying</u> <sup>(3)</sup> its delicate structure to the eyes of the world and enduring the darkness that surrounded it. <sup>(20)</sup></p>

実物の金閣寺と対面するまでは美術書で得た知識や父の言葉から紡ぎ出された幻想の金閣を思い描く。ST[3][4]は、TTでも擬人化されている。ST[4]で金閣は、“it”とモノ扱いされているため、擬人化の度合いを下げている。また、金閣に性別の有無をほのめかすような下線部2「美しい」という言葉は翻訳されていない。ST[4]の文のみでは、述部がはっきりしないため網掛け部分“continue to stand there”が明示化(explicitation)<sup>7</sup>されている。(1a)[4]下線部3「あらわにする」に対し(1b)[4]下線部3の“display”だけでは原文の官能性を再現できないため、“the eyes of the world”を付加し金閣に注がれる視線を強調したと考えられる。

### (2) 観光シーズンの金閣寺

ST (2a)	TT (2b)
<p>[1]こうして私は、舞い立つ埃と醜い群衆に囲まれている春の金閣の前に在った。[2]案内人の大声がひびいている中では、金閣はいつもその美を半ば隠して<sup>(1)</sup>、空恍けている<sup>(2)</sup>ように見えた。(141)</p>	<p>[1] And then I was there-standing in front of the Golden Temple, which on this springtime afternoon was surrounded by the swirling dust and by the hideous crowds. [2] While the guide's voice boomed away, the temple always seemed half to <u>hide</u> <sup>(1)</sup> its beauty and to <u>feign certain ignorance.</u> <sup>(2)</sup>(111)</p>

行楽日和の春の日、霞みがかった金閣が群衆を前に屹立している。[2]では表情を持つはずのない金閣がとぼけた表情をたたえている。観客の喧騒を受け流すしかない建築の宿命をあえて「空恍ける」という擬人化動詞で捉えているのだ。下線部(1)、(2)の擬人化は問題なく翻訳されている。

<sup>6</sup> 便宜上、複数文を引用する際、必要な場合は文ごとに[番号]を振った。左側に原文、右側に翻訳文を並べ、a・bのアルファベットを振った。下線部は筆者によるものである。

<sup>7</sup> Vinay & Darbelnet (1958) が提唱した「韻律効果 (prosodic effect)」の内の一つ。起点テキスト中では暗示されているにすぎない明細を翻訳が提供すること。

(3) 模型の小さな金閣

ST (3a)	TT (3b)
[1]そうしている場合ではなかったが、私はケースのなかの金閣にしみじみと見入った。[2]この小さな金閣は、燐寸の月に照らされて、影がゆらめいて、その繊細な木組を不安でいっぱいにして蹲踞していた。(1) (315)	[1] This was hardly an appropriate time for such activities, but I now stopped inside its case. [2] This little temple was illuminated by the moonlight of my match, its shadow flickered and its delicate wooden frame crouched there full of uneasiness. (1) (249)

放火目前にも関わらず溝口は、模型の金閣寺に見入ってしまう。[2]下線部(1)は、金閣の構造が人間の身体に喩えられている。そして感情を持つはずのない金閣が、木組の構造の中に不安を収容している。さらにSTの「つくぼう」という人間的な動作もTTでも擬人化動詞として忠実に翻訳されている。

2.2 擬人化の削除について

2.1では擬人化の維持について考察した。STのメタファーが、TT読者にとって理解困難だと判断された場合、メタファーの意味が加えられる場合も多い中で<sup>8</sup>、モリス訳では説明を付加せず、翻訳している。次に擬人化の英語翻訳の削除の一例を挙げる。以下のSTの擬人化とTTの差異と翻訳加工の要因を見ていく。

(4) 戦時中の金閣

ST (4a)	TT (4b)
[1]その夏金閣は、つぎつぎと悲報が届いて来る戦争の暗い状態を餌にして、一そういきいきと輝いているように見えた <sup>(1)</sup> 。[2]六月はすでに米軍がサイパンに上陸し、連合軍はノルマンジーの野を馳駆していた。[3]拝観者の数もいちじるしく減り、金閣はこの孤独、この静寂をたのしんでいるかのようだった <sup>(2)</sup> 。(46)	[1] That summer the Golden Temple seemed to use the bad war news that reached us day after day as a sort of foil against which it shone more vividly than ever. (1) [2] In June the Americans had landed in Saipan and the Allies were charging through the fields of Normandy. [3] The number of visitors decreased drastically and the Golden Temple seemed to be enjoying this loneliness, this silence. (2)(36)

上記の(4a) [3]下線部(2)の擬人化は維持されている。しかし(4a) [1]下線部(1)の金閣が戦火の悲報を活力とした擬人表現は、翻訳文で削除された。代わりに「あの夏、金閣は次々と届く悪い戦状を一種の金箔として、それは今までにないほど輝いた(拙訳)」という文が創作されている。ベスター(1990)は、三島の「独創的で、美しくても、唐突」なメタファーは訳し方によっては、文脈からすると不自然なものに見えてしまう可能性があるため、文章の流れをさまたげない程度に訳出する必要があると述べた。(4b)の[1]でも、文章の流れを妨げない訳文に加工されている。(4a)の[1]では戦乱の血と混乱に嬉々とする金閣が野蛮な獣のように描かれるが、なぜ読者は野蛮な属性を見出すのだろうか。それは金閣が「暗い状態を糧にした」のではなく「餌にした」からである。STの語彙「餌」は『大辞泉』によると「食事をわざと下品にいう語」である。この俗な語彙を美の象徴である金閣に対し唐突に使用することでSTの修辭的効果が働いている。しかし三島独特の擬人化メタファーは削除され変更訳が用いられた。これは、Berman(1985/2000)が提唱した高雅化(ennoblement)<sup>9</sup>にもあたるだろう。Fowler(1992)は、モリスをはじめとする日本文学研究者の翻訳はアカデミックな好み(preference)と文学的興味が反映され、優雅な文体に仕上がってい

<sup>8</sup> Hasegawa(2012)はメタファーの英語翻訳に関して、7つの翻訳技法があるとしその一つに(iv)the same metaphor combined with senseをあげた。つまり、メタファーを訳した後で、メタファーの暗示している内容を明示する方法である。

<sup>9</sup> Bermanは、翻訳過程に起こる12のテキスト「歪曲傾向」をまとめた。その一つの高雅化は、原文を美しく翻訳すること。『原典をいわば素材として利用しつつ「洗練された」文を作ること』と定義されている。(『翻訳の倫理学 彼方のものを迎える文学』p.60参照)「高雅化」に関しては藤田省一の訳を参考にした。

ると指摘した。Venuti(1998/2008) も、翻訳文がしばしば不可視性(invisibility)<sup>10</sup>の働いた「滑らかな」テキストとなることを批判した。まさには(4b)はVenutiが批判していたような「不可視的な作用」が働き、金閣の擬人化が削除されている。

### (5) 戦後初めての冬と金閣

ST (5a)	TT (5b)
[1] 雪に包まれた金閣の美しさは、比べるものがなかった。[2] この吹き抜けの建築は、雪のなかに、雪が吹き入るのに委せたまま <sup>(1)</sup> 、細身の柱を林立させて、すがすがしい素肌 <sup>(2)</sup> で立っていた。 <sup>(3)</sup> (92)	[1] The Golden Temple was incomparably beautiful as <u>it stood</u> there enveloped in snow. [2] There was something refreshing about <u>the bare skin</u> of that draughty building, with its slender pillars rising close to each other, and <u>with the snow blowing freely into its interior</u> ... (72)

(5a) [1]では、「金閣寺が美しい」という主情報を打ち立てている。(5b)では(5a)下線部(3)の「金閣寺が立っていた」という情報を網掛け部分のように先取りして読者に提示している。(5a) [2]の主部は「吹き抜けの建築」(金閣)である。そして述部は、「委せる」と「立つ」である。しかし(5b)では“**There**”を形式主語、述部を“**refreshing**”としている。(5b)下線部3で「with O C」 「OがCの状態」という独立分詞構文を使い金閣の状態を表している。つまり英語翻訳を直訳すれば「細身の柱をそれぞれ聳え立たせ、雪が自由にその内部に吹いている吹き抜けの建築の素肌には清々しいものがあつた。」となる。このように、風景に対する溝口の視点が入り込むことによって、(5a)よりも擬人化の程度は低くなっている。言い換えれば「吹き抜けの建築」が立っているという金閣を主語とした文が、溝口の視点から語られる事態叙述文となっているのだ。金閣の擬人化(5a)下線部(1)の「委せる」は削除され翻訳文の金閣には主体性が感じられない。風雨にさらされるのは直立する建築物にとっては当たり前であるが、溝口にとって金閣は天候を拒否することも許諾することもできる生きた建築物なのである。しかし(5b)の翻訳文ではそれが伝わらない。また、(5a)下線部(2)の「素肌」で、下線部(3)「立っていた」は、(5b)では、[1]下線部(3)に「立っていた事」、[2]の下線部2に「素肌」という言葉が離れて存在することによりさらに擬人化傾向が弱まっている。

### 3. 第10章について

ここまで金閣寺の擬人化部分を比較した。(4) (5)においては比較的小さなシフトで、作品のプロットに与える影響は少ない。しかし、次に考察する10章での擬人化削除は金閣寺と溝口の関係に大きな影響を及ぼしている。

#### 3.1 第10章での擬人化削除について

小説の最終章である10章では、溝口が最後の別れをしようと金閣を眺める。明暗を自在に操る金閣に圧倒され、溝口は身体感覚を失うほど疲弊する。10章はこれまで確認した金閣寺の擬人表現よりも擬人化の程度が高く、小説中における金閣寺の主体性も高い。なぜなら建築物が人間的な性質を持ち合わせるだけでなく、その力が溝口に実際に作用するからである。10章では溝口・金閣間で一種の「コミュニケーション」が成り立っているともいえるだろう。以下、10章の金閣寺の擬人化に焦点をあて、STとTTの差異を探る。

##### 3.1.1 10章での擬人化表現の削除が金閣寺の主体性に与える影響

10章では金閣寺は輝きで溝口の肉体縛り、疲弊させる。その輝きが失われた後に溝口は金閣寺へと走り出し放火する。この流れが、金閣・溝口両者の主体性のパワーバランスを追う上で重要であるため引用も原文の順番のままとなっている。

<sup>10</sup> 翻訳者自身が「流暢な」英語に訳出し、慣用的で「読みやすい」目標テキストを産出する傾向があり、その結果目標文化(target culture)での異質性を抑えた「不可視性」のあるテキストが生まれる。

(6)暗闇におぼめく金閣寺

ST (6a)	TT (6b)
<p>私はこの二つのあいだに、私の生涯を呑み込むに足る広い淵が口をあけていようとは、夢想もしていなかった。</p> <p>というのは、そのとき私は最後の別れを告げるつもりで金閣のほうを眺めたのである。</p> <p>金閣は雨夜の闇におぼめいており<sup>11</sup>、その輪郭は定かではなかった。それは黒々とまるで夜がそこに結晶しているように立っていた。瞳を凝らして見ると、三階の究竟頂にいたって俄かに細まるその構造や、法水院と潮音洞の細身の柱も辛うじて見えた。しかし嘗てあのように私を感動させた細部はひと色の闇の中に融け去っていた。(318)<sup>12</sup> ↓</p>	<p>I did not imagine for a moment that a gulf great enough to swallow my entire life was opening up between me and what I intended to do.</p> <p>For at that moment I gazed at the Golden Temple to bid it a last farewell. The temple was <u>dim</u> in the darkness of the rainy night and its outline was indistinct. It stood there in deep black as though it were a crystallization of the night itself. When I strained my eyes, I managed to make out the Kukyocho, the top story of the temple, were the entire structure suddenly became narrow, and also the forest of narrow pillars that surrounded the Choondo and the Hosui-in. But the various details of the temple, which had moved me so greatly in the past, had melted away into the monochrome darkness. (252) ↓</p>

放火の手筈を整えた溝口は最後に金閣を眺めた。金閣は闇の中に立っているだけである。金閣が暗闇に微かに見えたことを描写した文(6a)の下線部は、擬人化めいた表現になっていると考えられないだろうか。「美が何か別のものに化けている」と信じている心理状態を加味すれば③そらとぼけるという定義の解釈も可能なのではないだろうか。だとすれば、(6b)の下線部は一種の擬人化削除である。

(7) 金閣の煌めき

ST (7a)	TT (7b)
<p>[1] ↑が、私の美の思い出が強まるにつれ、この暗黒は恣まに幻を描くことのできる下地になった。</p> <p>[2] この暗いうずくまった<sup>(1)</sup>形態のうちに、私が美と考えたものの全貌がひそんでいた。[3] 思い出の力で、美の細部はひとつひとつ闇の中からきらめき出し、きらめきは伝播して、ついには昼とも夜ともつかぬふしぎな時の光りの下に、金閣は徐々にはっきりと目に見えるものになった。[4] これほど完全に繊細な姿で、金閣が隈々まできらめいて、私の眼前に立ち現れたことはない。[5] 私は盲人の視力をわがものにしたかのようだ。[6] 自ら発する光りで透明になった金閣は<sup>(1)</sup>、外側からも、潮音洞の天人奏楽の天井奏楽の天井画や、究竟頂の壁の古い金箔の名残をありありと見せた。<sup>(2)</sup> [7] 金閣の繊巧な外部は、その内部とまじはった。[8] 私の目は、<sup>(3)</sup> その構造や主題の明確な輪郭を、主題を具体化していく細部の丹念な繰り返しや装飾を、対比や対称の効果も、一望の下に収めることができた。<sup>(3)</sup> (319-320)</p>	<p>[1] ↑ As my remembrance of the beauty grew more and more vivid, however, this very darkness began to provide a background against which I could conjure up my vision at will. [2] My entire conception of beauty lurked within this somber, <u>crouching</u><sup>(1)</sup> form. [3] Thanks to the power of memory, the various aesthetic details began to glitter one by one out of the surrounding darkness; then the glittering spread wider and wider, until gradually the entire temple <u>had emerged before me</u> under that strange light of time itself, which is neither day nor night. [4] Never before had the Golden Temple showed itself to me in so a perfect form, never had I seen it glitter like this in its every detail. [5] It was as though I had appropriated a blind man's vision. [6] The <u>light that emanated from the temple itself had made the building transparent</u><sup>(1)</sup> and <u>standing by the pond I could vividly see the paintings of angels on the roof in side the Choondo and the remains of the ancient golden foil</u>.<sup>(2)</sup> [7] The delicate exterior of the Golden Temple had become intimately mingled with the interior. [8] <u>As my eyes took in the entire prospect</u><sup>(3)</sup>, I could perceive the temple's structure and the clear outline of its motif, I could see the painstaking repetition and the decoration of the details whereby this motif was materialized, I saw the effects of contract and of symmetry. (252-253)</p>

11 「おぼめく」の意味は、『広辞苑』によれば、①はつきりしない。たしかでない。ほのめく。②気がかりに思う。不審に思う。確かでない③そらとぼける。

12 引用部分の連鎖があった場合は、解説部分でその旨を断る。下記の引用と連続しているという意味で↓、上記の引用と連続しているという意味で↑を用いる。

(7a) [2]の下線部1は擬人化動詞が翻訳されている。(7a) [6]は建築様式を誇張する金閣の擬人化描写だが、(7b)では翻訳されていない。(7a)は(7b)で、二文構造になりトピックが①金閣が自ら発した光で、透明になったこと②主人公が金閣を見ることができたことの二つに整理されている。さらに、(7b) [6]の網掛け部分 “standing by the pond I could vividly see” は増訳され、さも「池から」だと金閣を一望できたという含意のある論理的な英文に再構成されている。“I could see”という英訳<sup>13</sup>には「見ようとして見た」という含意があり、見ようとしなくても金閣がこれ見よがしに装飾を誇張した意味との差異がある。牧野(2008)もこの問題に言及しているが、「見えた」という場合、自然に主体の目に入ってくるのである。翻訳文の「見る」行為の強調により、溝口の主体性が強まった。一方で、擬人化の削除により金閣寺の主体性が弱まっている。言い換えれば、原文が金閣寺が輝きを見せつけたことを前景化しているのに対し、翻訳文は溝口の「見る」行為を前景化している。これは、Vinay and Darvelnet (1958/1995)の翻訳技法 (translation strategies)、一般翻訳方略の中では起点言語(target language:TL)の意味と視点を変える調整 (modulation) にあたる。つまり、STでは金閣寺を主語とする事態叙述文であるが溝口の命題文に変更した。(7a) [8]は主語が「私の目」述部「収めることができた」だが、論理的な英文作成のため3回も「見る」行為が強調されている。前田(2006)は英語話者が、何がトピックになっているのかを強く意識すると述べ、これを英文の「トピック密着」と読んでいる。英文では文のトピックが明示された後も、再確認するかのように再びトピックに言及するのだ。網掛け部分に示したように(7b) [8]では「金閣を見ることが可能であった」というトピックに何度も言及している。そのため、翻訳文には原文に存在しなかった知覚動詞の挿入が目立つ。

#### (8) 幻の金閣寺の煌めき

ST (8a)	TT (8b)
[1]私は激甚の疲労に襲われた。 [2]幻の金閣 <sup>(1)</sup> は闇の金閣の上にまだありありと見えていた <sup>(2)</sup> 。[3]それは燦めきを納めなかった。[4]水ぎわの法水院の勾欄はいかにも謙虚に退き <sup>(3)</sup> 、その軒には天竺様の挿肘木に支えられた潮音洞の勾欄が、池へむかって夢みがちにその胸をさし出していた <sup>(4)</sup> 。(322-323)	[1] I was overcome by intense weariness. [2] Above the Golden Temple that existed in the darkness I could still vividly see <sup>(2)</sup> the Golden Temple of my vision <sup>(1)</sup> . [3] It had not yet concluded its glittering. [4] The railing of the Hosui-in at the water's edge withdrew with the greatest modesty <sup>(3)</sup> , while on its eaves the railings of the Choondo, supported by its Indian-style brackets, thrust out its breast dreamily towards the pond. <sup>(4)</sup> (255-256)

溝口は金閣寺と対峙しその美に抗うことができず疲弊する。[4]では、金閣の身体が擬人化され、TTでもそれが維持されている。(8a) [2]は擬人化ではないものの、(8a) [2]下線部(2)の「見えていた」を含む金閣寺の事態叙述文から、(8b) [2]で溝口を主語とする命題文に変更されている。「見えていた」という自発自動詞は、自然に見えたというニュアンスがあるのに対し “I could see”には「見ようとして見た」という行為主の主体性が感じられる。

<sup>13</sup> 天の海に 雲の波立ち 月の船 星の林に 漕ぎ隠る見ゆ(柿本人麻呂、巻7) 天の海に雲の波が立ち、月の船が星の林に漕いで隠れていくのが見える。(現代語訳) On the sea of heaven/ the waves of clouds rise, and I can see/ the moon ship Disappearing/ as it is rowed into the forest of stars. (英語訳)『日本語を翻訳すること』pp.134-135 参照。牧野(2008)はこの翻訳に違和感を示している。

(9) 薄れていく金閣

ST (9a)	TT (9b)
きらめく幻の金閣は薄れかけていた。勾欄は徐々に闇に呑まれ、林立する柱は分明ではなくなった。水の光りは消え、軒庇の裏の反映も消え去った。やがて細部はことごとく夜闇に隠れて、 <sup>(1)</sup> 金閣はただ黒い一ろのおぼろげな輪郭をとどめるだけになった。…… 私は駆けた。(326)	The glittering temple of my vision had begun to fade. The railings were gradually swallowed up in the darkness and the forest of slender pillars lost its reflection on the back of the eaves also vanished. Soon all the details were concealed in the darkness and the Golden Temple left nothing but a vague, black outline. I ran. (258)

ここまで見てきたように(6)では、闇の中に朧げに見えていただけの金閣寺が(7)(8)で徐々に自ら光を発し、(9)で息絶えるように暗闇に紛れる。金閣寺が美の猛威を奮うのをやめたのを確認し下線部のように金閣へ走り出すのだ。装飾を誇示し溝口を翻弄しようとする働きかける描写からも金閣寺の擬人化傾向が高いことがわかる。そのプロットを考慮すれば、金閣寺の擬人化が削除されたことにより両者の力関係の推移が希薄になったことは、重大な問題である。

3.1.2 まとめ

再三述べたように、翻訳文では金閣の主体性が弱まりその代わりに溝口の主体性が強まった。以下の表に、特に翻訳文において金閣の主体性の弱まりと、溝口の主体性の強まりが見られた部分についてST・TT比較をまとめた。

表 1 STとTTの擬人化の削除:比較表

ST(筆者により抜粋)	STの性質	TT(筆者により抜粋)	TTの性質	翻訳方略
(7a)[6] 金箔の名残をありありとみせる。	・金閣寺(主語)の事態叙述文 ・金閣寺の擬人化削除	(7b)[6] I could vividly see the paintings of angels on the roof in side the Choondo and the remains of the ancient golden foil.	I(主語)の命題文	調整 事態叙述文 →命題文
(7a)[8] 私の目は、(中略)一望の下に収めることができた。	私の目(主語)収める(述語)	(7b)[8] As my eyes took in the entire prospect, I could perceive I could see the painstaking repetition and the decoration of the details whereby this motif was materialized, I saw the effects of contract and of symmetry.	I(主語)の命題文	明示化 主語の変化
(8a)[2] 幻の金閣は闇の金閣の上はまだありありと見えていた。	金閣寺(主語)見えていた(述語)の事態叙述文	(8b)[2] Above the golden Temple that existed in the darkness I could still vividly see the Golden Temple of my vision.	I(主語)の行為文	調整 事態叙述文 →命題文

3.2 「不具」のモチーフと知覚の強まり

ここまで10章における金閣の擬人化削除による金閣寺の主体性の弱まりを概観した。同時にそれに伴う溝口の「見る」行為の強調を確認した。次にTTに溝口を主語とする命題文が増加したことによって、色濃く浮かび上がった溝口の主体性について考えたい。本作品では、小説を構成する要素として「不具」のモチーフ(motif)が頻出する。例えば、主人公の「吃音」、友である柏木の「内翻足」、繁華街を歩く「片目が潰えた犬」、「三人片輪」という溝口に向けられる揶揄などの「不具」のイメージで溢れている。10章では「耳鳴りの痼疾」を持つ人のように金閣の美しさを聞き、(7)[5]のように「盲目」の視力で金閣を認知し、(10)晴眼者である溝口が「弱法師」の主人公で盲人の俊徳丸のように、ハンデを持つ知覚で金閣に対峙する。さらに、盲目の俊徳丸が拝んだ日想観の入日と金閣が照応する。つまり「不具」のある知覚に喩えられた溝口の知覚が10章では強調されるのだ。

### 3.2.1 視覚の不具と金閣の知覚

下記(10)の引用は(8)と(9)の間に位置する。「盲人の強い視力」というオキシモロン(oxymoron)をレトリックとして利用し、溝口の知覚が研ぎ澄まされたことを強調している。

(10) 能「弱法師」盲目の俊徳丸

ST (10a)	TT (10b)
<p>[1]『このひどい疲労をどうしたものだろう』と考えた。[2]『何だか熱がこもっていて、けだるくて、手を自分の思うところへ動かすこともできない。[3]きっと私は病気のなだ』。[4]金閣はなお耀っていた。(1)[5]あの「弱法師」の俊徳丸が見た日想観<sup>14</sup>の景色<sup>(2)</sup>のように。[6]俊徳丸は入日の影も舞う難波の海を、盲目の闇のなかに<sup>(3)</sup>見たのであった。[7]曇りもなく、淡路絵島、須磨明石、紀の海までも夕日に照り映えているのを見た。[8]私の身は痺れたようになり、しきりに涙が流れた。[9]朝までこのままできて、人に発見されてもよかった。[10]私は一言も、弁疏の言葉を述べないだろう。(324)</p>	<p>[1] What should I do with this terrible weariness, I thought? [2] Somehow I felt feverish and languid and my hands would not move where I intended. [3] Surely I must be ill. [4] The Golden Temple was still glittering before me, just like the view of the Jissokan that Shuntokumaru had once seen. (2) [5] Within the black night of his blindness (3) Shuntokumaru had seen the setting sun playing lambently on the Sea of Namba<sup>15</sup>. [6] He had seen Awaji Eshima, Suma Akashi, and even the Sea of Kii reflecting the evening sun under a cloudless sky. [7] My body seemed to be paralyzed and the tears flowed incessantly. [8] I did not mind staying here just as I was until the morning came and I was discovered. [9] I should not offer a word of excuse. (257)</p>

疲労で溝口の身体が麻痺するのに対し、金閣の輝きは増していく。能「弱法師」の主人公俊徳丸が盲目で捉えた太陽のように、金閣がきらめいていた。(10a)の[4]のトピック文「金閣はなお耀っていた。」と[5]の直喩文は倒置構造になっている。この二文を、(10b)では[4]の一文にまとめている。また、(10b)[4]では、網掛け部分“before me”が増訳されて金閣の位置を再確認している。10b[5]下線部3では、新たに“black”という色彩語を挿入している。また、(10a)下線部3「闇」に対し(10b)下線部3では“night”という訳語を選択し“the setting sun”と語彙場(lexical field)を等しくしている。このように(10)では溝口の「見る」行為が、盲人の俊徳丸の盲目の視力という「不具」のモチーフによって強調されている。

### 3.2.2 翻訳文の味わい

そもそも金閣寺の美への探求は「古い黒ずんだ小っぼけな三階建」を溝口の「目の力」によって点検することから始まった。その物語の最終章10章で「見る」行為を強調した単語“I could see”などが多く散見されることは自然に思えてはこないだろうか。かなり強引にまとめると、溝口の「見る行為」を前景化させた翻訳文は「弱法師」「盲目の視力」などの「見る行為」が強調されたモチーフとの一貫性がある。それが翻訳者の意図だとはいえなくとも、結果的にTTでは「溝口の知覚」がSTよりも強調されたと考えられないだろうか。『金閣寺』は、金閣寺の美しさを感じできなかった主人公が物語の終わりで初めて美を知覚することができるという長編小説である。よって、(7b)(8b)のように知覚動詞が多く挿入され「見る」行為が強調された翻訳文は、「金閣の美を知覚する」という溝口の使命との整合性があるといえないだろうか。

<sup>14</sup> 西に向かい、落日の有様を見て浄土を思い願う修行のこと。「弱法師」の中では、日想観に入った俊徳丸は、かつて見た難波江の美景をくつきりと思ひ浮かべ「満目青山(ばんぼくせいざん)は心にある(すべての景色は、心の中にある)」という意味深い言葉を発する。

<sup>15</sup> 正しくは“Naniwa”でTTの“Namba”は誤訳である。

#### 4. 最後に

溝口は金閣との出会いから放火という帰結に向かうまで金閣の擬人化により執拗にその美を語り続けた。本稿では、英語翻訳における金閣の擬人化に関し ST・TT 比較を行った。2 章では擬人化翻訳の削除と維持について探った。続く 3 章では『金閣寺』10 章における擬人化の削除や、日英表現の差異が及ぼす影響について考察した。考察の結果 10 章の金閣寺と溝口のパワーバランスは原文と翻訳文とでは大きく異なることがわかった。しかし翻訳文を新たな文芸作品として解釈したとき、原文とは異なった面白さが見出せるのではないだろうか。

#### 参考文献

- Berman, A (1985/2000) Translation and the trials of the foreign, translated by L.Venuti, in (Ed.)*The Translation Studies Reader* 3-ed.pp.240-253 “La Traduction comme épreuve de l'étranger,” Texte (1985): pp.67– 81. Routledge.
- Fowler, E. (1992). Rendering Words, Traversing Cultures: On the Art and Politics of Translating Modern Japanese Fiction”, *The Journal of Japanese Studies* (Vol.18, No.1, pp.1-44) The Society for Japanese Studies]
- Hasegawa, Y (2012). *The Routledge Course in Japanese Translation*. London. New York.:Routledge
- Vinay, J.-P. & Darbelent, J. (1958/1995). Comparative Stylistics of French and English. A Methodology for Translation, Juan Sager and M.J.Hamel.AmsterdamJohn Benjamins
- L.Venuti, in (Ed.) *The Translation Studies Reader* 3-ed.pp.84-93
- Venuti,L. (1998/2008).*The Scandals of Translation: A History of Translation*, London and New York: Routledge.
- 池上 嘉彦(2006)『英語の感覚・日本語の感覚〈ことばの意味〉のしくみ』NHKブックス
- 河合 讓 (1967) 「日本文学翻訳の理論と実際—特に三島由紀夫「金閣寺」の英訳を中心として—」『広島商大論集』7, (2), pp.171-195
- 平子義雄(1999)『翻訳の原理』大修館書店
- ベスター, ジョン (1990)「没後20年 三島由紀夫特集 翻訳者の立場から」『新潮』87,(12), pp.239-242新潮社
- 前田尚作(2006)『日本文学英訳分析セミナー』昭和堂
- 牧野成一(2018)『日本語を翻訳するということ』中央公論新社

#### 辞典

- 新村出編 (1973)『広辞苑』第二版 岩波書店
- 松村明編 (2012)『大辞泉』第二版 小学館